

模階層がみとめられる。

(5) 専業農家率は39% (1980年) と高く、農業専従者率、男子あつぎ専従者がいる農家率とも県下最高率を示し、農業従事者の質の高さを示している。

(6) 近年、一元共同出荷が伸び悩み、個人の出荷形態が以前にも増して多様化をみせていることと、近接市場の需要、価格動向を考慮して収益性の高い作物を選定して高度な輪作体系をとっていることから、東京近郊の立地性を意識した近郊農業地域としての性格が強まっている。

(7) 三芳町と関東の市町村主導型で先発的に工場を誘致した地域で同じ大規模型・分散立地型の工場進出タイプとの比較により、1960年～1970年における農業の変化をみると、三芳町は農家率が著しく減少し工業導入などによる高度成長の影響を

うけている。しかし、農家数の減少は小さく、特に最初の5年間には専業農家数が増加し、経営耕地の規模拡大の志向がみられ、一般的にも高度経済成長により農業の変貌が著しいこの期間において、三芳町の農家の営農志向がいぜんとして強かったことが際立っている。このことは、その土地割の特徴から、工場進出の農業への影響の及ぼし方も他の市町村と異なってくるためだとおもわれる。

以上のことから、三芳町は、短冊型地割の整然とした広大な耕地を基盤とし、東京近郊の立地からくる好条件のもとに、都市化の進行の波に逆らって農業経営を発展、継続させようとする営農志向の高さから、東京近郊では稀にみる優秀な経営内容にある農業地域であるということができよう。

湘南地域に関する観光地理学的考察

——海浜レクリエーション地帯の形成と発展——

森 恵 子

神奈川県相模湾に面した湘南地域、即ち東の葉山から西の大磯までの7市町（逗子・鎌倉・藤沢・平塚・茅ヶ崎の5市と葉山・大磯両町）は、年間4,000万人以上の観光客が利用する県内一日帰りレクリエーション地帯であり、その中心は宗教的観光都市の鎌倉と、鎌倉を含めて我が国最大の海浜レクリエーション地帯を形成している海岸部である。

この、湘南地域に於ける近代以降、現在までの海浜レクリエーション地帯の形成と発展を、環境認識の変遷という歴史地理学の視点も加えて、観光地理学の見地から解明を試みようとするのが、本論文の目的である。

江戸時代、湘南地域は東海道が横断し、江ノ島・鎌倉両参詣地、及びそれに通ずる地方道の在る臨海地域であった。即ち、東海道の宿場町（藤沢・平塚・大磯）と門前町（片瀬・雪ノド・長谷）の他は、相模川沿いや小漁港近辺に集落が立地している農漁村が殆どであった。

海浜レクリエーションとして歴史的に最も古い海水浴は、湘南地域に於いては幕末期から外国人により行われていたが、日本人の始めたのは明治

17年（1884）頃であり、医師の薦める海水に身を浸したり浜辺に横たわる治療法及び健康増進法であった。湘南地域の海水浴場兼保養地化を推進したのは、バルツ、長与専斎と松本順の3人の医者であり、長与専斎は鎌倉由比ヶ浜に保養所を創設（1886）し、松本順は1885年大磯に海水浴場を開設して芝居等で海水浴の普及に努めた。

松本は磯浜、波撃力等の条件から大磯を海水浴場として選定したが、遠浅の砂浜海岸である鎌倉ではそのような条件は考慮されず、また海水浴が遊泳化するに従い、1900年頃からは遠浅の砂浜海岸が海水浴場として好まれるようになった。更に別荘の建設にあたっては、背後の丘陵の存在が好まれて、大磯、鎌倉そして御用邸の建設された葉山の集落外縁部の海岸から山裾にかけて保養地化が進行した。

関東大震災（1923）の地盤隆起により大磯は衰退し、見せ物小屋等娯楽設備を備え、また交通条件にも恵まれた鎌倉（由比ヶ浜）が大衆的な海水浴場として繁栄した。砂丘地帯であった藤沢鶴沼地区では、地主と旅館経営者が別荘開発を押し進めた。江ノ島電鉄（1902）、小田急電鉄（1929）の

開通が更に発展を進め、昭和初期には片瀬海岸が海水浴場として繁栄するようになった。サナトリウムの建設された茅ヶ崎と平塚は、茅ヶ崎では別荘地と海水浴場が発展をみせたが、平塚は商工業都市としての道をたどった。

以上のように、昭和初期に湘南地域は東部から、交通網の発達、海水浴の普及により京浜地域の日帰り行楽地となり、別荘も最大戸数を数えた。しかし第2次世界大戦は湘南地域全体を保養地から住宅地域へと転換させた。山の手の別荘は分譲されて住宅に、海岸の別荘は会社の寮・保養所へと変わる一方、片瀬海岸西浜地区には東急系資本等による近代的観光施設が1950年代に建設されて、湘南地域の海浜レクリエーション地帯の中

心地となった。高度経済成長下、1964年の東京オリンピックやその後のレジャーブームを経て、観光の集約化が進行した。現在では、海水浴の他にヨット、サーフィン、ボードセーリング等海浜レクリエーションの多様化、個性化が進み、利用者主体は若者となり、四季を通じて利用されるようになった。

そして海浜レクリエーション地帯と住宅地との交錯は、自然環境の悪化と共に多くの問題を生み、レクリエーション利用に新たな秩序が求められているのが現状である。神奈川県湘南なぎさプラン（1985発表）や新地域計画等、行政側が主導して、新たな海岸文化の創造地となるよう湘南地域は脱皮を図ろうとしている。

清瀬市を中心とした病院の立地に関する地理学的考察

安岡節子

本研究は、数多くの病院が立地する清瀬市の病院街に焦点をあて、病院の立地に関し、地域とのかかわりとともに、その歴史的背景や疾病構造の変化などから、地理学的な視点にたって考察を行なうことを目的とした。

論文構成としては、第1章で清瀬市を概観し、第2章で多摩地区全体の病院の分布を調べ、その中での清瀬市の病院分布の特異性を明らかにするとともに、多摩地区における特殊病院の分布の特徴とその理由の考察を試みた。第3章では清瀬市に立地する、病院の集中している病院街について、その成立過程から現在に至るまでの経過を、すべてが元結核療養所であったことから結核の変遷とともに追っていき、現況と今後の課題についてもふれた。そして、第4章にて、清瀬市の地域構成を調べ、病院街と地域とのかかわりについて考察を行なった。

本論文の要旨は次のとおりである。

多摩地区の病院の分布を概観したところでは、人口に対する病院数では全国平均を下回っているが、1病院あたりの平均病床数では全国平均を大幅に上回っていた。それは多摩地区には、一般的に病床数の多い精神病院数が卓越していること、又一般病院でも多数の精神病床をかかえる病院が多いことなどが理由として考えられる。

市町村別に病院数を調べてみると、多い順に八王子市、町田市、清瀬市となっており、人口との比率を考えると、人口の少ない清瀬市に病院が集中しており、他の市町村と比べてかなりの不均衡をなしている。病床数でも同様で、清瀬市では八王子市に次いで病床数が多く、人口との比率でもやはり圧倒的に高い数字を示している。しかし、その病床の内容をみると、清瀬市では結核病床がかなり多く、八王子市、青梅市、町田市などでは精神病床が多い。又東村山市では大きな療養所があるためらい病床が多い。多摩地区の、それも都心部からより離れたこれらの地域に、精神、結核、伝染といった内容の特殊病院の割合が多いことは、多摩地区での大きな特徴といえる。それは、特殊病院が創設された当時、その性質上広い敷地や静かな環境を必要とし、患者もほとんどが入院でしかも長期療養が多いため、都心部にある必要がなく、都市の側でも特殊病院を内部に立地させるのは不都合であるから、都市の膨張につれて都市外方へと次第に押し出され、遠心的に移動をしてきたためである。

清瀬市にできた最初の結核療養所も、そのような遠心的移動の一つであった。昭和の初めの頃、まだ清瀬村の時で広大な雑木林が残されており、そこへ府立清瀬病院が建設されたのである。結核